KSKQ 第三種郵便物認可KSKQ（サロン・あべの）増刊通刊224号1992年8月17日

サロン・あべの

出合い ふれあい 助け合い

NO74

フルートとギターの午後

毎月十二回（二・四・六・八の日）発行 一九九一年九月三日第三種郵便物認可

＜七月の出会い＞

梅雨明けまじかを予想させるような激しい雨が、朝まで降り続いた平成四年七月十八日（土）午後一時三十分から幸分ホールにおいて、サロン・あべの七月の出会いが開かれた。

今回の出会いは、少し普段と趣をかえてさわやかな音楽を気軽に皆さんで楽しんでみようとコンサートを企画した。

お招きしたのは、ギターの伊藤明弘さん、フルートの沖村朋子さん。お二人とも関西を中心に活躍されておられる。

数多いレパートリーのなかから、当日はバッハやドビュッシーのクラシックの名曲から日本の童謡や琴の演奏曲として馴染み深い「春の海」といった曲まで、幅広い選曲をしていただきとてもたのしいコンサートだった。

二時間近くのコンサートののち、お二人を囲んで音楽のことや楽器についてのこと、さらにこれからの活動などについてもお話を伺うこともできてアットホームな雰囲気になれた。

あいにくの天候で参加者が比較的少なかったり、冷房がなく蒸し暑さのなかでのコンサートだったが、こころよいひとときを味わうことが出来た。

参加者二十一名、司会、南光龍平。

●演奏者のおふたりから

「音の楽しみ」

伊藤明弘

先日は、私たちのコンサートを企画していただき、有難うございました。

普段あまり聞き慣れないクラシック音楽が多かったので、少々しんどかったかもしれませんが、そこは数百年の歴史を経て、今も残る名曲ですから、何か新しい発見も、皆様それぞれにあった事と思います。

シェイクスピアの戯曲や万葉の歌が、今なお人々に新しい感動を与え続けるのと同じ様に、モーツアルトの音楽や、何百年という歳月を経て脈々と伝わる民謡の中に、私たちが日常の現代的な生活の中で、忘れかけている何かを想い起す事ができるわけです。これは、まさに先人達の偉業というか、人間の精神的想像力のたくましさを感じます。

産業革命以来、人類の文明は急激な進歩をとげ、暮らし自体はえらく楽になったのですが、では、はたして人間の中身の方はどうかというと、ちっとも変っていない。それどころかむしろ退化しているのではないか、と思われる部分もかなりあります。

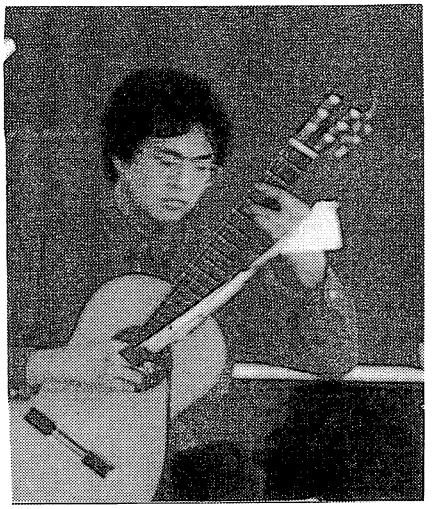
もちろん、新しい考え方が出て来たり、という進化もあるのですが、では今の時代にモーツアルトの様な、わずか二十数年間で何百曲もの名曲を世に残す人間が登場してくれるだろうか、と考えると、何故か、絶望的な気持ちなってしまうのです。

このまゝ人類の文明が進み続けると、ますます人間の精神活動の場は少なくなり、いよいよ第二第三のモーツアルト登場が、不可能になるのではないか……、そんな気さえして来るのです。

何も、世の中が便利になると人間がダメになる、という事ではなくて、人間が、その自己表現の手段としてもっともっと大切に扱わなければならなかった言葉や、絵＋音を、商業の発達とともに、単なる商売道具としてあまりにも軽率に、まさに使い捨ての文化として使ってしまった事に問題があるのです。

私達の様に、現代文明の中で生きていながら古い音楽を演奏すると言う事は、当然そこで矛盾を起しているわけです。

が、それが、単なる一部の人々の「昔は良かった」的な回顧主義に終らない為にも、今日のコンサートの様な場が大事だと思っています。一人でも多くの人々に、本当の「音の楽しみ」を味わっていただける様に、私たちも少しずつ、頑張って行きたいと思っています。



リラックス出来たフルート演奏

沖村朋子

朝、降り出した雨を眺めながら「今日は

どんな演奏会にできるかなぁ。雨雲をふき飛ばすような演奏ができれば…」と思いました。

私の、何かがワクワクする本番前の気分と同じように、空がみるみる晴れ渡る頃、演奏会はスタートしました。

昔、アメリカのタイナーによくあったようなサロンの扇風機は、その場の雰囲気を和やかにかきまぜてくれたので、私は普段よりリラックスした気持ちで吹き始めることができました。

お客さんの表情を間近にしながら、その反応を体で感じて演奏をする、とうことの中に、とても新鮮でとても自然な喜びを得ることができた一日でした。

本当に一曲一曲、大切に聴いていただけたと思います。

これからも、このデュエットとしての演奏を充実させていきたいですし、自分自身のフルートにも、もっと磨きをかけていろいろな場所で、皆さんにまたお会いできたら、と思っています。

どうも、ありがとうございました。

●伊藤さん　沖村さん
ありがとうございました

当日、コンサートに来られた方々から、さまざまなご感想をよせていただきました。

演奏いただいた伊藤さん、沖村さんへの感謝の気持ちと、またお聴きしたいという期待をこめて、ご紹介させていただきます。

（敬称略　五〇音順）

●新聞で「サロンあべの」の事を知り初めて寄せていただきました。大雨の後のむし暑い中での演奏会は、思わす素晴らしい時を持たせていただき感謝致します。

フルートのさわやかな音色にうっとりと暑さも忘れる思いでした。せっかくの機会に観客が意外と少ないのが残念です。伊藤さんのトークもとてもリラックスした気分になれていい感じでした。

サロンの雰囲気の明るさにとてもほのぼのした思いです。演奏会の終了後の輪になってのおしゃべりもとてもアットホームで、初参加でもまったく違和感がなくとても楽しかったです。

例会にはできる限り出席させていただきたく思いますので、今後共よろしくお願い致します。ありがとうございました。

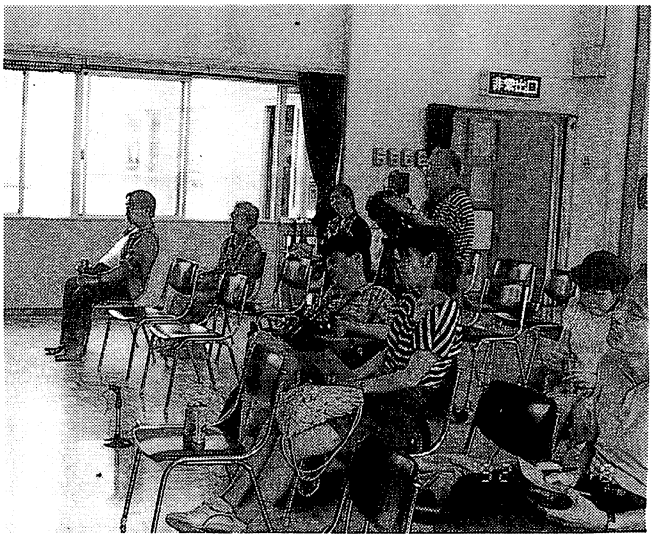
（岩坪美枝子）

●楽しかったじゃあ〜りませんか。また来ます。

（川井利雪）

●サロンあべのの毎月の出会いも時々はこういうコンサート的なものもいいと思います。今後も期待しています。（川田和子）

●すばらしい演奏ありがとうございました。



ギターの音は小さい方だと言われていましたが、迫力のある大きな音だったのでびっくりしました。

今ピアノの曲をよく聴いているので興味があり、フルートもギターの演奏も盛り上がってなかなかよかった。

フルートの種類も色々なものがあるので驚きました。又聴かせて下さい。

（北下武博）

●今日はありがとうございました。

●心にしみる日本歌、なつかしいメロディー、フルートのきれいな音色、ギターの心強い演奏を目の前で聞かせていただき楽しい時間をありがとう。すばらしい演奏、すばらしい出会いでした。（木村圭子）

●久しぶりに生の演奏も聞くことが出来て大変楽しかったです。

これからもこういう企画をお願いします。

（田平雅之）

●演奏もお話しもとても楽しかったです。

子供がもう少し大きくなったらぜひいっしょに聞かせたいと思います。ケーナの音も初めて生で聞けて良かったです。

（土井京子）

●フルートとギターの曲の数々を堪能させて頂きまして本当にありがとうございました。私にとりましては、フルートとギターの合奏ははじめて聴いたのですが、素晴らしかったです。先日、いづみホールで宮城道雄を偲ぶ二〇周年記念コンサートで「春の海」を尺八と琴の演奏で聴きましたけれど、又、違った趣向でとてもよかったです。あとの座談会も楽しかったです。ありがとうございました。（平澤邦子）

●ラビ・シャンカールまでフルートとギターでやるとはびっくりしました。

朝日新聞で知り来ました。わきあいあいのコンサート、大変良かった。

「浜辺の唄」が大変好きで、歌曲でも、いつ聴いても胸がジーンときます。今回もなかなか表現力のある演奏で感動しました。

（村上外喜夫）

ふれ愛 空の旅 ①

上平幸雄

八月二十五日から九月三日まで十日間、アメリカに行けることになりました。

大阪市が、今年が国際障害者の十年の最終年にあたるのを記念して、障害者をバークレーを中心としたアメリカ西海岸に派遣し、現地の障害者福祉の状況を学ぼうとい

う事業を企画したのです。題して「ふれ愛空の旅」。これに、ぼくも行けることになったのです。

大阪市内に在住している障害者で、十八歳以上四十歳未満、障害等級一・二級、パスポートが取得でき、介護者を一人同行できること、という条件で六月に募集がありました。募集人員は二十名で、参加者の決定は公開抽選でした。

ぼくがこの募集のことを知ったのは、締め切りのほんの数日前。モタモタしていては間に合わないと思い、直接市役所の障害福祉課まで行って申請用紙をもらい、翌日には郵送を済ませました。以前から一度はバークレーに行ってみたいと願っていましたから、何の躊躇もなく申し込みました。

抽選結果もこの目で確かめたくて、長居の身体障害者スポーツセンターで行われた公開抽選には、仕事を休んで参加しました。その意気込みが通じたのか、六倍程度の競争率でしたが、運よく当選したのです。

出発までにはまだもう少しありますが、帰国報告を必ずサロン紙に書きますので、おたのしみに。

あっちゃんのシングルライフ

5

山本篤江

再びシングルライフ

やっぱり「しゃば」は、いいですね。少しずつだけど以前の生活に戻りつゝあるんですよ。でも、手術の後遺症かどうかは分かりませんが、肩の辺りが重くって。これが、無くなれば元気なときと全く変らないのですが…。でも、元気印の「あっちゃん」に戻りましたよ。あと少しで、再び「シングルライフ」ですね。そんなに簡単に行くかな？そう行きたいな。

もうすぐ、よそじ（四十路）。

あと、もう少しは、自分の出来ることを見詰めながら、若い時程無理をしないで、大事にやっていきます。

難しくかっこうつけると、人生観が少しは、変ると思いましたが、病院にいるときだけ。

人間て、すぐに忘れてしまうんでしょうか？。

それとも、私がいけないんでしょうか。

おしらせ

九月の出会い

日時　九月十九日（土）午後一時～四時

内容　「地域福祉を創る」

桃山学院大学社会学部

社会学科コース教授

上野谷加代子氏

場所　育徳コミュニティーセンター２Ｆ．研修室「大阪市阿倍野区阪南町五－十五－二八、車イストイレ・スロープ有り」

会費　なし

申込みと問合わせ先　TEL・06-691-1028

（冨田慶子）

∞サロン・あべの紙の朗読テープが出来ました∞

山本敏子さんのご協力で、サロン・あべの紙七三号の録音テープが出来ました。

バックナンバーは三九号から、七二号の分があります。五〇号は五周年記念紙になっており、九〇分と六〇分の二本のテープに収録されています。

サロン紙朗読テープをご希望の方には、ダビングをしますので、冨田までお申し出下さい。（☎〇六－六九一－一〇二八）

介護者の立場から

加賀谷　正

障害者の介護をして、はや六年がたちました。いつも特定の人を介護しているので、初めての人でなければ、プロの介護ができると、少しだけ自負しております（上手になったのではなく、要領よくなっただけかもしれませんが）。介護を通じて私が得たことや感じたことを書きたいと思います。

まず一つめは、思いやりや優しさに更に磨きがかかったことです。小学校卒業の時に色紙にクラスメイトから別れの言葉を書いてもらったのですが、その中に某女の子が「だれにでも男子でも女子にでも優しい加賀谷君はみんなに好かれるよ。その気持ちをいつまでも大切にしてね」と書いていました。あれから中学、高校、大学と進み、今では会社の人達と仲よく仕事をやっています。七月頃、会社の駐車場から更衣室に向かっていた時、コンクリートの上でカブトムシがひっくり返って、元に戻ろうと手足を動かしていたので、事務所の横の木にくっつけてあげました。虫を助けて、考えてみたのですが、こんな優しい気持ちを持てたのは、障害者の介護をしているからからなと顧みました。人生は一度しかないので、介護をしていなかった場合の自分と較べることはできませんが、きっとそうだろうと思います。人に優しくすると、その人が優しさを与えてくれるというでしょ。

二つめは、世の中には、道徳のある人とない人がいるということを身をもって経験することができました。私の介護はいつも車いすを押しているので、時々階段で立ち往生します。すると、道徳のある人は、だまっていても向こうから車いすを持ちましょうかと言ってきてくれますが、徳のない人、又は芯のない人、ちっぽけな人、正義感のない人は助けてくれません。人には、徳のある人とない人がいるというのは、介護をしてなくてもわかっていましたが、やはり、身をもって何度も経験すると、百聞は一見にしかずという様に、私の有効な知識になりました。今では、人を見る目がついたと思っています。

三つめは、介護の依頼を新聞や情報誌で見かけますが、ほとんどの場合、生活介護は週一回の依頼をされている様です。これで介護者が見つかればいいですが、だめな時は月一回、極端に言うと年二～三回に変えると見つかるかもしれません。介護を始めたいと思っている人にとって、週一回は重荷だと思います。

介護を六年してきて、思ったこと、感じたことを書いてみました。自分の書きたいことを的確に表現できませんでしたが、何かの参考になれば幸いです。

「おもろい　姉ちゃん」

田淵　美登利

乙女のとまどい

私は、二三才。

独身のうら若い乙女（のつもり）です。

しかし、寮生さんの中には、「田淵先生」と呼んでくれる人もいれば、「おばちゃん」と親愛の情をこめて呼んでくれる人もいます。（そういう人に限って、はるかに年上）

そして、二〇代前半の女性は、家庭から離れた寂しさからか「お母ちゃん」と呼びます。「お母ちゃん」と甘える彼女の相手をしていたある日、四〇代半ばのOさんが「お母ちゃん」と甘えた声を出したのです。

ケースワーカーとして、受容すべきか否か一瞬迷った末、「ちょっとOさんの母親は、苦しい」と笑ってごまかしてしまった私なのでした。

ナンペイのひとこと＆ふたこと㉔

＊犬の引っ越し＊

私の家から、最寄りの駅であるＪＲ阪和線我孫子町駅へ出る道の途中に、二階建ての文化住宅が何件か建っている。

そのいくつかある文化住宅の一件の前に、いつも決まって寄り添うように寝そべっている二匹の犬がいた。

特別に可愛いとか目立つとかいう訳ではないが、ちょうどその犬たちのすみかのまえあたりを曲がると私の家が見えてくるという具合なので、旅行から帰ってきたり、夜遅く帰宅したときなど、その犬たちを見かけると、もうすぐわが家なんだなぁという気がしてきて、「ただいま」なんて声を掛けることもあった。

それに、大抵の場合臆病な性格の犬は、車椅子などが通りかかると「ワンワン、キャンキャン」それこそ力の限り吠え掛かってくる。多くは何度か通っているうちに慣れて吠えなくなるのだが、なかには「アホな犬」がいていつまで経っても車椅子が通りかかると懸命に「ワンワン、キャンキャン」とやってくれる。

そんな「アホな犬」には、「ええかげんにせんか！」といいたくなるのだが、例の二匹の犬たちは〝初対面〟のときから車椅子に乗っている私にも吠えかかってきたことはなかったようだ。そんなこともあっていつの間にか「ただいま」なんて声を掛けるようになっていたのだろうか。

ところが最近、その文化住宅のまえを通りかかってみて二匹の犬が居なくなっているのに気がついた。

いつも二匹仲良く寝そべっていたあたりには、犬小屋や餌箱が残ってはいるがどこかこぎれいに片づけられていて犬の気配はもう無くなっていた。

文化住宅の住人たちもほとんど引っ越してしまったようで、もうすぐ文化住宅も取り壊されてしまうのだろう。

阪和線の高架工事のためだとは分かっていても、めっきり増えた空き地と、取り残された空っぽの犬小屋なんかを眺めていると、どことなく自分の街が消えていくようなそんな淋しい気持ちにかられるのは私だけだろうか。

南光龍平

＃感謝します＃

カンパ・ハガキ・冊子・バザー用の品等ありがとうございました。

お礼を申し上げます。

七月のカンパ　金二〇、〇〇〇円

赤松、石田　律、伊勢村和子、井上憲一
岩坪美枝子、宇野律子、大高澄子、大塚一枝、岡本登志子、小川　哲、柿岡　緑、金岡千恵子、金子花江、木村圭子、小泉田恵子、阪口文夫、杉山蔦枝、竹内新作、竹中千代子、竹村定子、田中マサエ、蔵田、大丸昭典、手島八重子、中原友喜、南光龍平、長谷川マキエ、林三起子、日高香世子、蛭子フサエ、前田裕子、町野旬子、松島春子、丸山寿美子、三木法子、水戸春子、柳生幸子、山口弘子、山梨徳治、山本愛子、山本敏子、若林幸子、匿名四名。（敬称略）

Volunteer Center 15

九　ボランティアセンターの機能（各論）

⑥相談・助言
⑦評価

ボランティアセンター（ＶＣ）での相談には、ボランティアに対する活動をすすめるための相談と、ニーズをもつ人に対する問題を解決するための相談があるが、ニーズに対する相談は「ニーズ把握」のところに含めているので、ここでは活動を行う人への援助のひとつとしての相談・助言について考えてみたい。

最近ではボランティア活動が一般的になってきて、さまざまなかたちでの活動の機会が増えたことから、比較的気軽に参加できるようになってきた。それだけに活動に対する考え方も多様であり、活動を行っていくうえでのトラブルや悩みをもつ人も多くなり、フォローアップとしての相談や助言がいっそう重要になっている。

相談への対応では、ボランティアの側から相談しやすいような場所や雰囲気づくりが重要であるが、あらためて相談をもちかけるということには抵抗がある人も少なくないことから、ボランティアが集まって自然に問題や悩みを話し合える会を定例的に開いていくことも必要である。

一方、活動に対する評価では、活動がニーズをもつ人の問題解決にうまくつながっているかどうかをみるとともに、ＶＣでは特にその活動がそのボランティアにあっているかどうか、ボランティア自身の主体形成などに役だっているかどうかといったこともあわせてみていくことが必要である。

したがって、評価は活動の修了時だけでなく、ボランティアからの活動報告などをもとに中間期にも定期的に行っていくことが求められ、評価の結果によっては活動の方法を変更したり、関係機関や団体との協力を行っていくことも必要になる。また、評価とともに適切な相談・助言を行うことによって、ボランティアにとっても活動に対して自信もつために大きな役割を果たすことができる。

いずれにせよ、ボランティア活動はさまざまなニーズを解決するための働きかけであるから、その成果については客観的な評価を行っていかなければならない。「ボランティアなんだから結果よりも活動すること自体に意義があるんだ」ではすまされないし、また、ボランティアが本来もっている社会を変えていくという力は、きちんとした評価があってこそすすめられるものなのである。

原田　仁

微笑みと嘆きの像

べつに奇を衒（てら）うつもりはないのだが、私は墓場を見るのが好きである。

といっても、狭い場所にびっしりと四角い石が並べてあり、そばに見たこともないような文字で書かれた細長い板が無数に突き刺してある、あの日本の墓場ではない。私が好きなのは、町なかでも深い森を残している西洋の墓地である。

墓地はふつう観光コースにはない。最初に訪れることができたのは、オーストラリアで電車の乗り換えをしているときだった。駅の近くにたまたま大きな墓地があった。

いまでもよく覚えているのは落馬している男性の像が墓石の上にあったことだ。墓石には「若く聡明で健康であった私たちの息子が突然、馬から落ちて死んでしまった」と刻まれていた。愛する息子は二十歳前後で亡くなってしまった。親は、もうたまらなく悲しくて、このような文と像を墓石に彫ったのだろう。

もうひとつ、心に残った墓地は、フランクフルトの墓地である。地図で確かめて半日がかりで探しあてると、門には粗雑なつくりの大きな天使の上半身が、泣いているような顔をして手を広げ、訪問者を迎えていた。

中にはいってみると全体が小鳥の鳴く美しい森である。青くおい繁った樹々の間を歩いていると、足音に驚いたリスが小道を横切り、幹をかけ上がっていく。

そこで目をひいたのは、墓石にもたれかかり激しく慟哭している女性の像だった。それは、いまにも嗚咽（おえつ）が漏れてくるように、雨ならば石像の涙が墓石を濡らしていると思えるほどに、埋葬されたその日の悲しさと痛ましさを今日まで伝えていた。見わたせば、この墓地には、そのような慟哭の像がいくつもあるのである。

死はこのように悲しく辛いものにちがいない。しかしこの像のように、その悲しみをいつまでも形にして残しておいてもいいのだろうか。死もまた、その人の人生であり、それを涙と嘆きに染め上げてしまってよいものだろうか。

私は、門で泣いていた巨大な天使を思いだし、十字架につき苦悶の表情をうかべているイエスの像が、この美しい墓場にいくつも立ち並んでいることに気がついた。

そして思いだしたのは、母方の祖父母が眠る丘だった。そこは藪蚊の群れる荒れた、けっして美しくはない墓地であったが、その中心には、焼き場を見下ろすようにしてかすかに微笑みを浮かべる等身大の石仏があった。幼いとき、その笑みを見つけた私は招きよせられるような恐怖を感じたものだ。

しかし、亡き人の身体が焼かれるさまを見つめるように立つその姿に、なぜ微笑みが必要だったのか。ドイツの美しい墓地を歩いていると、その答えが聞こえてくるような気がしたのである。

―盆の日に―

（知）

美智子のこんな話

岸田　美智子

Ａ園の対応にあ然！

『外出サービス』で今後の活動の方針を決めて行くため、ある日、Ａ園の障害者の方々に生活実態調査アンケートにお伺いしました。

その日は、毎月行っている外出日の前日でした。アンケートが終わって、ほっとしていると、障害者会員のＢ子さんが明日の外出介護の事で、どうなっているのかと言う質問が突然出て来ました。いつも外出日の一週間から十日くらい前に介護者を決定して、お名前などを書いて、障害者本人に連絡して下さるように職員の方にＦＡＸで送っているのですが、この職員の方が障害者の方々に連絡していなかったのです。おまけに、このＢ子さんの外出は、事務局に問い合わせるとキャンセルになっていました。でも、その事は、Ｂ子さんは全然知らないようでした。

そして、訪問した私達に「絶対、明日外出したい。キャンセルなんてしていません」と大きな声でさけび出してしまいました。Ａ園の独断行為を知らなかった『外出サービス』の私達は、Ｂ子さんに謝りました。介護者をどうにかしようと相談しはじめていると、Ａ園の職員の方がこの騒ぎを聞きつけて出てきて「Ｂ子さんの外出は、Ｂ子さんのお母さんと相談して、キャンセルに決めました。Ｂ子さんにも話していると思うのですが、どうもご迷惑をかけてすいません」などと言いながら丁寧に謝られました。そしてこの職員から、あまりにもＡ園で『外出サービス』を利用する障害者が増えすぎたので最初の考えとはくいちがって来たので、『外出サービス』と話をしたいなどと言われてしまいました。

この訪問のあとで『外出サービス』の介助者として登録してくださっている方が、このＡ園の障害者のお母さんと友達なので事情を電話で聞いてみました。七月の外出日には、Ａ園からのキャンセルが十一件も出ていましたので、何かおかしいな思っていたのですが、実はＡ園の職員が『外出サービス』に登録して下さっている二五名くらいの障害者の方々の親に全部電話をかけて説得し、外出しないようにしてしまったそうです。おまけに、来月は『外出サービス』が休みだと、かってに決め伝えているそうです。

大人の障害者本人の行動を本人ぬきで決めてしまうなんて信じられません。このようなＡ園のやり方を皆さんはどう思われますか。私達は、怒りとＡ園に対して不信感を持ってしまいました。

近々このＡ園とは、話し合う事になっていますが・・・。

編集人；サロン・あべの運営委員会・＜サロン・あべの＞NO.74[`92. 8.15 発行] 定価¥１００.
代　表；上平幸雄〒545 大阪市阿倍野区阪南町２－２０－１９－２０３　電話06-621-4365
連絡先；冨田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６．電話０６－６９１－１０２８
表　題；斉藤孝文・筆
印　刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町２－２－１０－１０１．TEL.06-691-2365.

発行人；関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜２－１０－１３緑橋グリーンハイツ１Ｆ］

毎月十二回（二・四・六・八の日）発行　一九九一年九月三日第三種郵便物認可